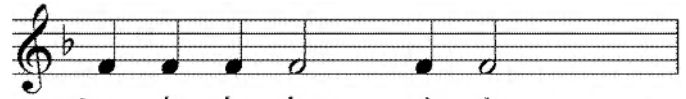


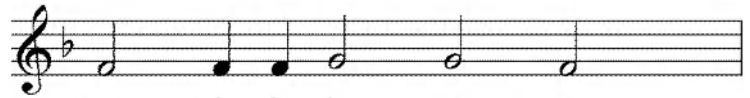
【 重聯禱 】

司祭) われらみなたまい まつと い われら おもい まつと い
我等皆 霊 を全 うして曰わん、我等の 思 を全 うして曰わん、



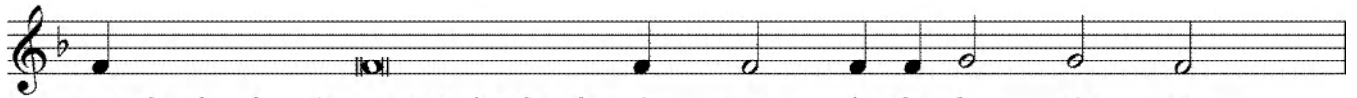
しゅあわれめよ。
主 憐

司祭) しゅぜんのうしゃ わ れつそ かみ なんぢ いの き い あわれ
主 全能者、吾が列祖の神よ、爾 に禱る聆き納れて 憐 めよ、



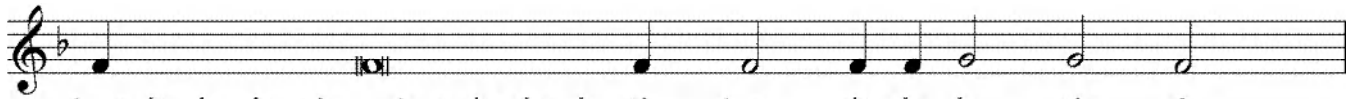
しゅあわれめよ。
主 憐

司祭) かみ なんぢ おおい あわれみ よ われら あわれ なんぢ いの き い あわれ
神よ、爾 の大 なる 憐 に因りて我等を 憐 めよ、爾 に禱る、聆き納れて 憐 めよ、



しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅあわれめよ。
主 憐 主 憐 主 憐

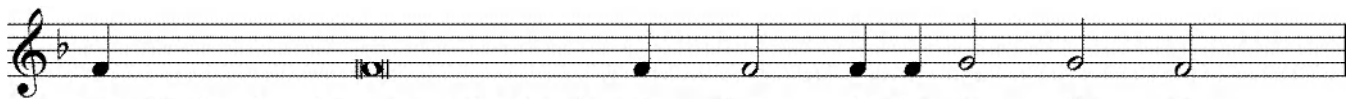
司祭) またわ くに てんのうおよ くに つかさど もの ため いの
又我が國の天皇及び國を 司 る者の爲に禱る、



しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅあわれめよ。
主 憐 主 憐 主 憐

司祭) またきょうかい つかさど そんき われら ぜんにほん ふしゅきょう およ
又 教會を 司 る尊貴なる我等の全日本の府主教 セラフィム、及びハリストスに於

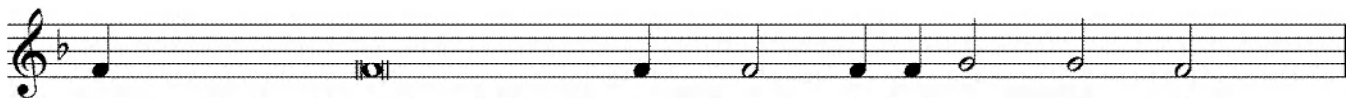
ける ことごと われら けいてい ため いの
ける 悉 くの我等の兄弟の爲に禱る、



しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅあわれめよ。
主 憐 主 憐 主 憐

司祭) またわれら けいてい しょしさい しょしゅうどうしさい およ
又我等の兄弟、諸司祭、諸 修 道司祭、及びハリストスに於ける我等の衆 兄弟

ため いの
の爲に禱る、

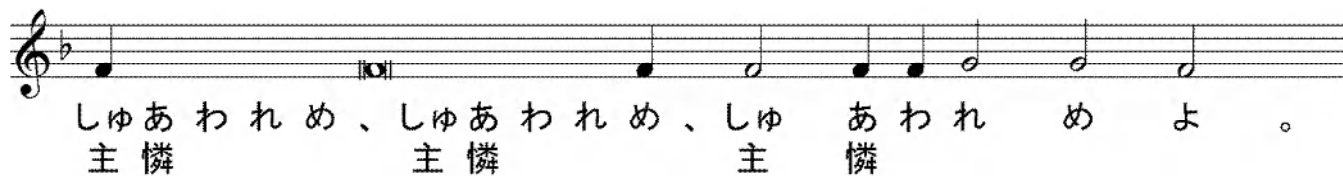


しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅあわれめよ。
主 憐 主 憐 主 憐

司祭) またつね きおく ふく しせい せいきょう パトリアルフ せいどう こんりゅうしゃ およ
又 恒に記憶せらるる、福たる至聖なる正 教 の総 主教、この聖堂の建 立 者、及

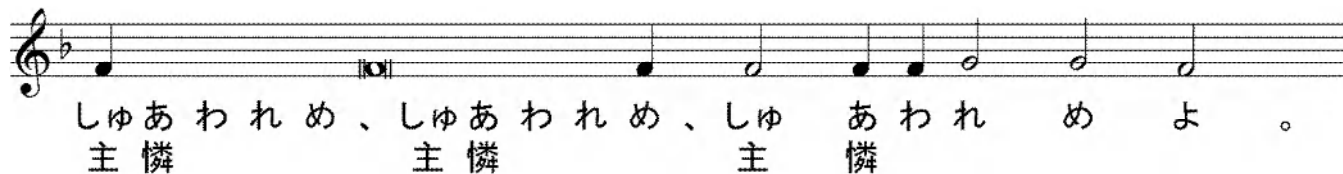
すで ねむ ことごと ふそけいてい こ ところ しょうほう ほうむ せいきょう もの ため
び已に寝りし 悉 くの父祖兄弟、此の 處 と諸方とに 葬 られたる正 教 の者の爲

いの
に禱る、



司祭) またこ しそん せいどう もの たてまつ ぜんぎょう おこな これ ろう これ うた およ
又此の至尊なる聖堂に物を献り、善業を行い、之に勞し、之に歌い、及び

ここ た なんぢ おおい ゆたか あわれみ あお のぞ もの ため いの
此に立ちて爾の大にして豊なる憐を仰ぎ望む者の爲に禱る、



(※ 特別な災害や特別な感謝がある時、重聯禱にその旨追加する場合がある。その場合も「主憐め、主憐め、主憐めよ。」と応えて歌う。)

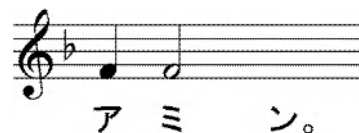
司祭) (黙誦：しゅわ かみ なんぢ しょぼく こ ねつせつ きとう う なんぢ あわれみ おお
主我が神よ、爾の諸僕より此の熱切の祈禱を受け、爾が憐の多きに

よ われら あわれ なんぢ めぐみ われら およ なんぢ ゆたか あわれみ あお
因りて我等を憐み、爾の恵を我等と凡そ爾の豊なる憐を仰ぐ

なんぢ たみ つかわ たま
爾の民に遣し給え、)

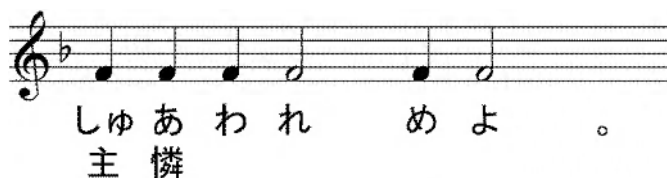
司祭) けだしなんぢ じれん ひと あい かみ われらこうえい なんぢちち こ せいしん けん いま
蓋爾は慈憐にして人を愛する神なり、我等光榮を爾父と子と聖神に獻ず、今

いつ よよ
も何時も世世に、



【 啓蒙者の聯禱 】

司祭) けいもうしゃ しゅ いの
啓蒙者よ、主に禱るべし、



司祭) しんじゃ けいもうしゃ ため いの ねがわ しゅ かれら あわれみ た
信者よ、啓蒙者の爲に禱らん、願くは主は彼等に憐を垂れん、



司祭) ^{しんじつ ことば もつ かれら けいもう} 眞 實 の 言 を以て彼等を啓 蒙 せん、



司祭) ^{ぎ ふくいんけい かれら ひら} 義 の 福 音 經 を彼等に啓 かん、



司祭) ^{かれら そのせい こう しと きょうかい いつ} 彼 等 を其 聖 ・ 公 ・ 使 徒 の 教 會 に一にせん、



司祭) ^{かみ なんぢ おんちよう もつ かれら すく あわれ たす まも} 神 よ、 爾 の 恩 寵 を以て、彼等を救い 憐 み 佑 け 護 れ よ、



司祭) ^{けいもうしゃ なんぢら こうべ しゅ かが} 啓 蒙 者 よ、 爾 等 の 首 を主に 屈 め よ、



司祭) (黙 誦 : ^{しゅわ かみ たか お ひく のぞ なんぢ どくせいし かみ わ しゅ} 主 我 が 神、 高 き に 居 り 卑 き を 臨 み、 爾 の 獨 生 子 ・ 神 ・ 我 が 主 イ イ ス ス ハ

^{つかわ にんげん すくい もの なんぢ ぼく けいもうしゃ そのこうべ} リ ス ト ス を 遣 し て 人 間 の 救 と な し し 者 よ、 爾 の 僕 ・ 啓 蒙 者 ・ 其 首 を

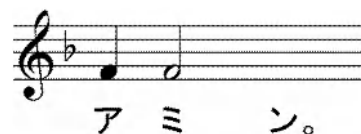
^{なんぢ かが もの かえり とし したが かれら ふくせい よくばん しょざい ゆるし} 爾 に 屈 め し 者 を 顧 み、 時 に 随 い て、 彼 等 に 復 生 の 浴 盤、 諸 罪 の 赦、

^{ふきゅう ころも たま かれら なんぢ せい こう しと きょうかい いつ かれら なんぢ} 不 朽 の 衣 を 賜 い、 彼 等 を 爾 が 聖 ・ 公 ・ 使 徒 の 教 會 に一にし、 彼 等 を 爾

^{えら むれ あわ たま} の 選 ば れ た る 群 に 合 せ 給 え、)

司祭) ^{ねがわ かれら われら とも なんぢちち こ せいしん しそんしえい な さんよう いま い} 願 く は 彼 等 も 我 等 と 偕 に、 爾 父 と 子 と 聖 神 の 至 尊 至 榮 の 名 を 讃 揚 せん、 今 も 何

^{つ よよ} 時 も 世 世 に、



【 信者の聯禱1 】

司祭) ^{しゅうけいもうしゃい}衆 ^{けいもうしゃい}啓蒙者出でよ、^{しゅうけいもうしゃい}衆 ^{けいもうしゃひとり}啓蒙者一人もなく、^{ただしん}唯信
^{じゃまたまたあんわ}者復又安和にして^{しゅ いの}主に禱らん、



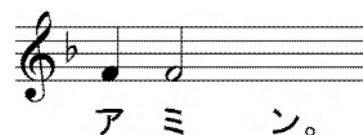
司祭) ^{かみ}神よ、^{なんぢ}爾の^{おんちよう}恩寵を以て、^{われら}我等を^{たす}佑け^{すく}救い^{あわれ}憐み^{まも}護れよ、



司祭) ^{えいち}睿智、

司祭) (黙誦：^{しゅ}主、^{ばんぐん}萬軍の^{かみ}神や、^{なんぢ}爾が^{われら}我等に、^{いま}今も^{なんぢ}爾の^{せい}聖なる^{さいだん}祭壇の^{まえ}前に^た立ち、^{なんぢ}爾
^{じれん}の慈憐に^{ふふく}俯伏し、^{われら}我等の^{つみ}罪と^{しゅうじん}衆人の^{あやまち}過との^{ため}爲に^{きとう}祈禱するを^{ゆる}赦し^{たま}給いし
^{なんぢ}を^{かんしゃ}感謝す、^{かみ}神よ、^{われら}我等の^{いのり}禱を^い納れ、^{われら}我等を^{なんぢ}爾が^{しゅうじん}衆人の^{ため}爲に、^{なんぢ}爾
^{いのり}に^{ねがい}祈と^{むけつ}願と^{まつり}無血の^{けん}祭とを^た獻ずるに^{もの}勝うる者となし^{たま}給え、^{われら}我等^{なんぢ}爾が^{せい}聖
^{しん}神の^{ちから}力にて^こ此の^{なんぢ}爾の^{ほうじ}奉事の^{ため}爲に^た立てし者を、^{もの}定罪なく、^{ていざい}蹟なく、^{つまづき}其^{そのりょう}良
^{しん}心の^{いさぎよ}潔き^{しょう}證を以て、^{もつ}何の時^{いづれ}何の^{ときいづれ}處にも^{なんぢ}爾を^よ籲ぶに^{かな}適う者となし
^{なんぢ}て、^{われら}爾^き我等に^{なんぢ}聴き、^{あいれん}爾が^{おお}哀憐の^よ多きに^{われら}依りて、^{ため}我等の^{じんじ}爲に^{もの}仁慈の者とな
^{いた}るを致せ、)

司祭) ^{けだしおよ}蓋凡そ^{こうえいそん}光榮尊貴^{きふくはい}伏拜は^{なんぢちち}爾父と^こ子と^{せいしん}聖神に^き歸す、^{いま}今も^{いつ}何時も^{よよ}世世に、

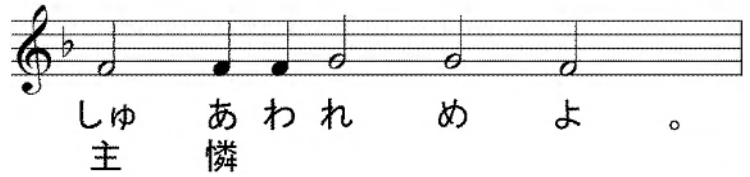


【 信者の聯禱2 】

司祭) ^{われら}我等復又^{またまたあんわ}安和にして^{しゅ いの}主に禱らん、



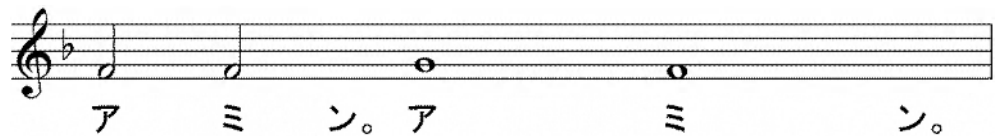
司祭) ^{かみ}神よ、^{なんぢ}爾の^{おんちよう}恩寵を以て、我等を^{もつ}佑け救い^{われら}憐み^{たす}護れよ、^{すく}あわれ^{まも}み護れよ、



司祭) ^{えいち}睿智、

司祭) (黙誦: ^{ぜん}善にして^{ひと}人を^{あい}愛する^{しゅ}主や、我等復^{われら}且^{また}数^{かつしば}爾に^{なんぢ}俯伏し、^{ふふく}爾に^{なんぢ}禱る、^{いの}我等の^{われ}禱を^{いのり}顧みて、^{かえり}我等の^{われら}靈と^{たましい}體とを^{からだ}凡そ^{およ}肉體と^{にくたい}靈神との^{れいしん}穢より^{けがれ}
^{いさぎよ}潔くし、^{われら}我等に、^{きず}玷なく、^{ていざい}定罪なく、^{なんぢ}爾の^{せい}聖なる^{さいだん}祭壇の^{まえ}前に^た立つを^{たま}賜え、
^{かみ}神や、^{われら}我等と^{とも}偕に^{きとう}祈禱する^{もの}者にも、^{いのち}生命と^{しん}信と^{ぞくしん}屬神の^{ちしき}智識との^{しんぽ}進歩を^{あた}與え
^{たま}給え、^{かれら}彼等が^{つね}常に^{おそれ}畏と^{あい}愛とを以て^{もつ}爾に^{なんぢ}務めて、^{つと}玷なく、^{きず}定罪なく、^{ていざい}爾
^{せいきみつ}の聖機密を^う領け、^{なんぢ}爾の^{てんごく}天國に入るに^い勝うる^た者となるを^{もの}得せしめ^え給え、^{たま})

司祭) ^{われら}我等常に^{なんぢ}爾が^{けんべい}權柄の下に^{もと}護られて、^{まも}光榮を^{こうえい}爾父と^{なんぢちち}子と^こ聖神に^{せいしん}獻ずるが^{けん}爲なり、^{ため}
^{いま}今も^{いつ}何時も^{よよ}世世に、



【 ヘルヴィムの歌 】



の法 っと り、
せ聖 い さ 三 んの う 歌 た
を い の ち を ほ 施 ど
こ す の せ 聖 い さ 三 ん
しゃ 者 に た て ま つ り
て、
この よ の つ と め
此 世 の 勤
を し り ぞ く べ し、
し 退 り ぞ く べ し。

司祭) (黙誦：肉 體の慾と快 樂とに縛られし者は、一 も 爾 光 榮の王に來り、或 は

ちか あるい ほうじ る た けだしなんぢ ほうじ てんぐん ため おおい
近づき、或 は奉事するに堪うるなし、蓋 爾 に奉事するは、天 軍の爲にも 大

おそ しか なんぢ い がた はか がた なんぢ じんあい よ ほん
にして畏るべきなり、然れども 爾 は言い難く量り難き 爾 の仁 愛に因りて、本

せい か うしな ひと われら ため アルヒエレイ またばんゆう しゅさい
性を易えず 失 わずして人となり、我等の爲に司 祭 首となり、又 萬 有の主 宰

よ われら こ ほうじ むけつさい せいじ つた たま けだししゅわ かみ
なるに縁りて、我等に此の奉事の無血 祭 の聖事を傳え 給えり、蓋 主我が神や、

なんぢ ひとりてんち こと さいり なんぢ ほうざ にな もの
爾 は 獨 天地の事を宰理す、爾 はヘルヴィムの寶座に荷わるる者、セラフィ

ムの主、イスライリの王、獨聖にして聖者の中に息う者なり、故に我爾
ひとりぜん 獨善にして善く納るる者に禱る、我罪ありて堪えざる爾の僕を顧み、我が
たましい 心とを 邪なる思慮より淨め、我神品の恩寵を被れる者を、
爾が聖神の力に藉りて、此の爾の聖なる食案の前に立ち、爾が至淨
なる聖體至尊なる聖血の機密を行 うに堪うる者となし給え、蓋我首を
かが 屈めて 爾に就き、爾に禱る、爾の 顔を我より避くる勿れ、我を 爾が僕
しゅう 衆の中より 却くる勿れ、乃 我罪有りて當らざる 爾の僕に此の祭物を
ささ 獻ぐるを致させ給え、蓋 ハリストス我が神よ、爾は獻ずる者と獻ぜらるる者、
う 受くる者と頒たるる者なり、我等光榮を 爾と 爾の無原の父と至聖至善に
して生命を 施す 爾の神とに獻ず、今も何時も世世に、)

司祭) (黙誦: 我等奧密にしてヘルヴィムを像り、聖三の歌を生命を施す三者に歌い、

いまこ よ おもんばかり ことごと しりぞ ベ てんし ぐん み にな たてまつ ばん
今此の世の 慮 を 悉く 退く可し、天使の軍の見えずして荷い 奉る萬

ゆう おう いただ よ
有の王を 戴 かんとするに縁る、ア ril イヤ、ア ril イヤ、ア ril イヤ。

われらおうみつ かたど せいさん うた いのち ほどこ さんしゃ うた
我等奧密にしてヘルヴィムを像り、聖三の歌を生命を施す三者に歌い、

いまこ よ おもんばかり ことごと しりぞ ベ てんし ぐん み にな たてまつ ばん
今此の世の 慮 を 悉く 退く可し、天使の軍の見えずして荷い 奉る萬

ゆう おう いただ よ
有の王を 戴 かんとするに縁る、ア ril イヤ、ア ril イヤ、ア ril イヤ。

われらおうみつ かたど せいさん うた いのち ほどこ さんしゃ うた
我等奧密にしてヘルヴィムを像り、聖三の歌を生命を施す三者に歌い、

いまこ よ おもんばかり ことごと しりぞ ベ てんし ぐん み にな たてまつ ばん
今此の世の 慮 を 悉く 退く可し、天使の軍の見えずして荷い 奉る萬

ゆう おう いただ よ
有の王を 戴 かんとするに縁る、ア ril イヤ、ア ril イヤ、ア ril イヤ。

かみ われざいにん きよ たま かみ われざいにん きよ たま かみ われざいにん
神よ、我罪人を淨め給え、神よ、我罪人を淨め給え、神よ、我罪人を

きよ たま
淨め給え、)

【 大聖入 】

司祭) 願くは主・神は其國に於て、我が國の天皇及び國を司る者を恒に記憶せん、

いま いつ よよ
今も何時も世世に、

ねがわ しゅ かみ そのくに おい きょうかい つかさど そんな われら ぜんにほん ふしゅきょう
願 くは主・神は其國に於て、教 會を 司 る尊貴なる我等の全日本の府主 教

セラフィムを恒に記憶せん、今も何時も世に、

ねがわ しゅ かみ そのくに おい すで ねむ ふしゅきょう ふしゅきょう ふ
願 くは主・神は其國に於て、已に寢りし府主 教 セルギイ、府主 教 イリネイ、府

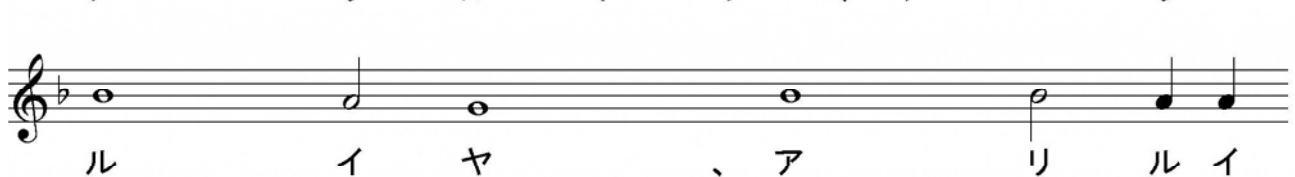
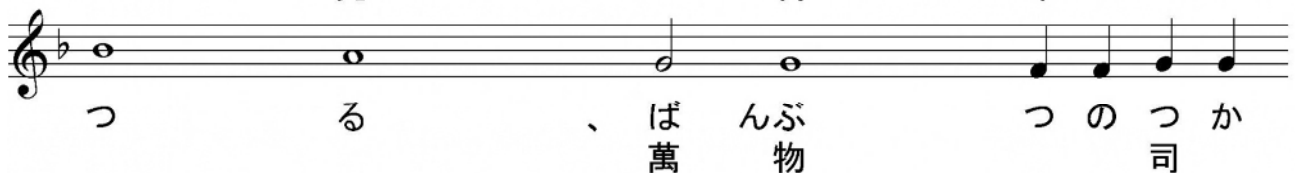
主 教 ウラディミル、府主 教 フェオドシイ、府主 教 ダニイル、大主 教 ニコライ、主

教 ニコライ、主 教 ペトル、(およ こと きおく われら すで ねむ かぞく
及 び殊に記憶せらるる 某)我等の已に寢りし家族、

けいていしまい もろもろ えんしゃ ほうゆうら つね きおく いま いつ よよ
兄 弟姉妹、 諸 の縁者、朋 友等を恒に記憶せん、今も何時も世に、

ねがわ しゅ かみ そのくに おい なんぢしゅうせいきょう ら つね きおく
願 くは主・神は其國に於て、爾 衆 正 教 のハリスティアニン等を恒に記憶せん、

いま いつ よよ
今も何時も世に、



司祭) (黙誦： 尊^{とうと} きイオシフは 爾^{なんぢ} の 潔^{いさぎよ} き身を木より下し、 淨^み き布に裹み、 香^{きよ} 料^{ぬの} にて 香^{つつ} 料^{こうりょう} にて

覆^{おお} い、 新^{あらた} なる墓^{はか} に藏^{おさ} めり、

ハリストスよ、 爾^{なんぢ} は神なるにより、 體^{からだ} にて墓^{はか} に在り、 靈^あ にて地獄^{ちごく} に在り、

右盜^{うとう} と偕^{とも} に天 堂^{てんどう} に在り、 父^{ちち} と聖 神^{せいしん} と共に寶座^{ほうざ} に在り、 限^{かぎり} なき者として一^{いつ}

切^{さい} を満^み て給^{たま} えり、

ハリストスよ、 我^わ が復 活^{ふくかつ} の 泉^{いづみ} たる 爾^{なんぢ} の墓^{はか} は、 生命^{いのち} を 施^{ほどこ} す者、 地堂^{もの} より

美^{うるわ} しき者、 実^{もの} に如何^{じつ} なる王^{いか} の宮^{おう} よりも 耀^{みや} ける者と 顯^{かがや} れたり、 顯^{もの} れたり、

尊^{とうと} きイオシフは 爾^{なんぢ} の 潔^{いさぎよ} き身を木より下し、 淨^み き布に裹み、 香^{きよ} 料^{ぬの} にて 香^{つつ} 料^{こうりょう} にて

覆^{おお} い、 新^{あらた} なる墓^{はか} に藏^{おさ} めり、

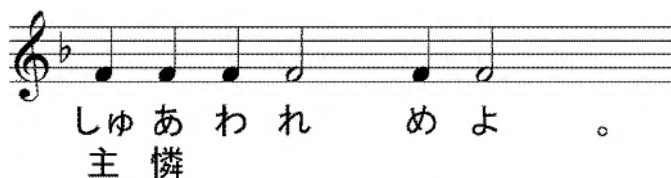
主^{しゅ} よ、 爾^{なんぢ} の 恵^{めぐみ} に因^よ りて恩^{おん} をシオンに垂^た れ、 イエルサリムの 城 垣^{じょうえん} を建^た て給^{たま}

え、 其^{そのとき} 時に 爾^{なんぢ} 義^ぎ の 祭^{まつり} 、 獻 物^{ささげもの} と 燔 祭^{やきまつり} を 喜^{よろこ} び饗^う けん、 其^{そのとき} 時に 人 人^{ひとびと} 爾^{なんぢ}

の 祭 壇^{さいだん} に 犢^{こうし} を 奠^{そな} えんとす、)

【 増聯誦 】

司祭) 我^{われ} 等^ら 主^{しゅ} の 前^{まえ} に吾^わ が 禱^{いのり} を 増^ま し加^{くわ} えん、



司祭) 獻^{ささ} げたる 尊^{とうと} き祭 品^{さいひん} の 爲^{ため} に主^{しゅ} に 禱^{いの} らん、



司祭) 此^こ の 聖 堂^{せいどう} 、 及^{およ} び 信^{しん} と 慎^{つつしみ} と 神^{かみ} を 畏^{おそ} る 心^{こころ} とを以^{もつ} て 此^こ に 來^{きた} る 者^{もの} の 爲^{ため} に 主^{しゅ} に 禱^{いの} ら
ん、



司祭) 我^{われ} 等^ら 諸^{もろもろ} の 憂 愁^{うれい} と 忿 怒^{いかり} と 危 難^{あやうき} とを 免^{まぬか} る 爲^{ため} に 主^{しゅ} に 禱^{いの} らん、



司祭) ^{かみ なんぢ おんちよう もつ われら たす すく あわれ まも}
神よ、爾の恩寵を以て、我等を助け救い憐み護れよ、



司祭) ^{こ ひ じゅんぜん せいせい へいあん むざい しゅ もと}
此の日の純全・成聖・平安・無罪ならんことを主に求む、



司祭) ^{へいあん てんし ただ きょうどうし わ れいたい しゅ ごしや たま しゅ もと}
平安の天使、正しき教導師、吾が靈體の守護者を賜わんことを主に求む、



司祭) ^{われら つみ あやまち なだ ゆる しゅ もと}
我等の罪と過とを宥め赦さんことを主に求む、



司祭) ^{われら たましい ぜん えき こと およ せかい へいあん たま しゅ もと}
我等の靈に善にして益ある事、及び世界に平安を賜わんことを主に求む、



司祭) ^{われら いのち よじつ へいあん つうかい もつ おわ しゅ もと}
我等の生命の餘日を平安と痛悔とを以て終らんことを主に求む、



司祭) ^{われら いのち おわり かな やまい はぢ へいあん およ}
我等の生命の終がハリスティアニンに適い、疾なく、耻なく、平安なること、及び

^{おそ しんばん おい よろ こたえ たま もと}
ハリストスの畏るべき審判に於て宜しき對をなすを賜わんことを求む、



司祭) ^{しせいしけつ}至聖至潔^{いた}にして^{さんび}至^{われら}りて^{こうえい}讚美^{ぢよさい}たる我等の光榮の女宰・^{しょうしんぢよ}生神女・^{えいていどうぢよ}永貞童女マリヤ

と、^{しょせいじん}諸聖人^{きおく}とを記憶^{われら}して、我等^{おのれ}己の身^{みおよ}及び^{たがい}互に^{おのおの}各の身^みを以て、^{もつ}並に^{ならび}悉く^{ことごと}

^{われら}の我等^{いのち}の生命^{もつ}を以て、^{かみ}ハリストス神^{いたく}に委託^{せん}せん、



司祭) (黙誦：^{しゅ}主・^{かみ}神・^{ぜんのうしや}全能者、^{ひとりせい}獨聖^{こころ}にして^{つく}心を盡^{なんぢ}して^よ爾を籲^{もの}ぶ者より^{さんび}讚美^{まつり}の祭

^うを受^{もの}くる者よ、我等^{われら}罪人^{ざいにん}の^{いのり}禱をも^う受^{なんぢ}けて^{せい}爾の聖^{さいだん}なる祭壇^{たづさ}に^{われら}携え、我等を、

^わ我が^{つみ}罪と^{しゅうじん}衆人^{あやまち}の^{ため}過との爲^{なんぢ}に、^{ささげもの}爾に獻物^{ぞくしん}と^{まつり}屬神^{けん}の祭とを^{けん}獻ずるに

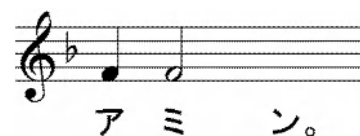
^た勝^{もの}うる者となし^{たま}給え、我等^{われら}に^{なんぢ}爾の^{まえ}前に^{おんちよう}恩寵^えを得^{われら}せしめて、我等^{まつり}の祭は

^{なんぢ}爾に^よ善く^い納れ^{もの}らる者となり、^{なんぢ}爾が^{おんちよう}恩寵の^{ぜんしん}善神^{のぞ}は^{われら}臨みて、我等^{うち}の中と^こ此の

^{そな}供え^{さいひん}られたる祭品^{なんぢ}と^{しゅうじん}爾の衆人^おとに^{いた}居るを^{たま}致させ^{給え}給え、)

司祭) ^{なんぢ}爾の^{どくせいし}獨生子^{じれん}の慈憐^よに^{なんぢ}因^{かれ}りて^{しせいしぜん}なり、^{いのち}爾は彼と至聖至善^いにして^{ほどこ}生命を施^{なんぢ}す^{しん}爾の神

と^{とも}偕に^{あが}崇め^ほ讚め^{いま}らる、^{いつ}今も^{よよ}何時も^よ世世に、



【 ニケア・コンスタンチヌーポリ全地公会にて採択されし信經 】

司祭) ^{しゅうじん}衆人^{へいあん}に平安、



司祭) ^{われら}我等^{たがい}互に^{あいあい}相愛^{どうしん}すべし、同心^うにして^{みと}承^{ため}け認^{めん}めんが爲^{なり}なり、





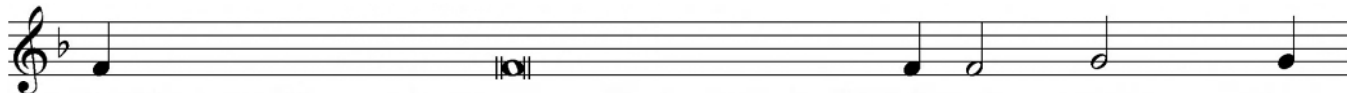
て わ か れ ざ る せ い さん しゃ を 、
分 聖 三 者

司祭) (黙誦：主^{しゅ}我^{われ}の 力^{ちから}よ、我^{われ}爾^{なんぢ}を愛^{あい}せん、主^{しゅ}は我^{われ}の防^{かため}固^{われ}、我^{われ}の避^{かくれが}所^{しゅ}なり、主^{しゅ}我^{われ}の

力^{ちから}よ、我^{われ}爾^{なんぢ}を愛^{あい}せん、主^{しゅ}は我^{われ}の防^{かため}固^{われ}、我^{われ}の避^{かくれが}所^{しゅ}なり、主^{しゅ}我^{われ}の 力^{ちから}よ、我^{われ}

爾^{なんぢ}を愛^{あい}せん、主^{しゅ}は我^{われ}の防^{かため}固^{われ}、我^{われ}の避^{かくれが}所^{しゅ}なり、)

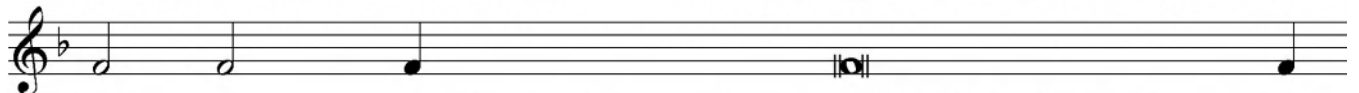
司祭) もん もん つつし き
門、門、 敬 みて聴くべし、



わ れ し ん ず 、 ひ と つ の か み ち ち ぜ ん の う し ゃ 、 て ん
我 信 一 神 父 全 能 者 天



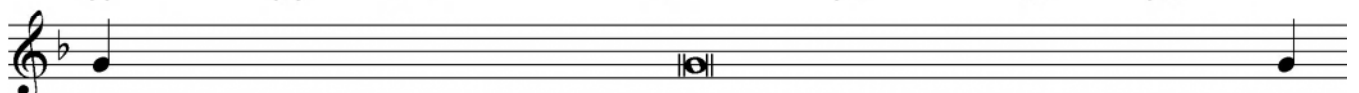
と ち 、 み ゆ る と み え ざ る ば ん ぶ つ を つ く り し
地 見 見 萬 物 造



しゅ を 、 ま た し ん ず 、 ひ と つ の しゅ イ イ ス ハ リ ス ト
主 又 信 一 主



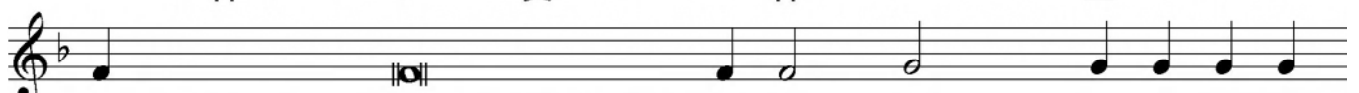
か み の ど く せ い の こ 子 、 よ ろ づ よ の さ き に
神 獨 生 子 萬 世 前



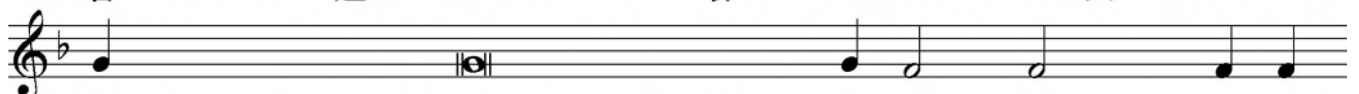
ち ち よ り う ま れ 、 ひ か り よ り の ひ か り 、 ま こ
父 生 光 光 眞



と の か み よ り の ま こ と の か み 、 う ま れ し
神 眞 神 生



も の に て つ く ら れ し に あ ら ず 、 ち ち と い っ
者 造 非 父 一



た い に し て ば ん ぶ つ か れ に つ く ら れ 、 わ れ
體 萬 物 彼 造 我



ら ひ と び と の た め 、 ま た わ れ ら の す く い の た
等 人 人 爲 又 我 等 救 爲

めにてんよりくだり、せいしんおよびどうて貞
天降、聖神及童貞

いぢょマリヤよりみをとりひととなり、わ我
女マリヤより身を取人となり、わ我

れらのためにポンテイピラトのときじゅうじかに
等た爲にポンテイピラトの時十字に

くぎうたれ、くるしみをうけほうむら
釘うたれ、苦しみをうけほうむら

れ、だいさんじつにせいしよにかないてふく
れ、だいさんじつにせいしよにかないてふく

かつつし、てんのぼり、ちちのみぎにざ
かつつし、てんのぼり、ちちのみぎにざ

しこうえいをあらわしていけるものとせ
しこうえいをあらわしていけるものとせ

しものとしんぱんするたためにまたきたり、
しものとしんぱんするたためにまたきたり、

そのくにおわりなからんを、またしんず、せい
そのくにおわりなからんを、またしんず、せい

いしんしゅいのちをほどこすものちちよりい
いしんしゅいのちをほどこすものちちよりい

で、ちちおよびこともにおがまれほめら
で、ちちおよびこともにおがまれほめら

れ、よげんしゃをもつかつていいしを、また
れ、よげんしゃをもつかつていいしを、また

預言者 以 嘗 言 し を 、 ま た 又



しんず、ひとつのせいなるおおやけなるしとの
 信 一 聖 公 使 徒

きょうかいを、われみとむ、ひとつのせんれ
 教 會 我 認 一 洗 禮

い、もってつみのゆるしをうるを、われの望
 以 罪 赦 得 我 望

ぞむししゃのふくかつ、ならびにらいせい
 死 者 復 活 並 來 世

のいのちを、アミン。
 生 命

【 アナフォラ 】

司祭) ^{ただ}正しく立ち、^た畏れて立ち、^{おそ}敬みて^た安和にして^{つつし}聖なる^{あんわ}獻物を^{せい}奉らん、^{ささげもの}
^{たてまつ}



へいわのあわれみ、さんようのまつり
 平 和 憐 讃 揚 祭

を。

司祭) ^{ねがわ}願くは我が^わ主^{しゅ}イイススハリストスの^{めぐみ}恩、^{かみちち}神父の^{いつくしみ}慈、^{せいしん}聖神の^{したしみ}親は、^{なんぢしゅう}爾衆

^{じん}人と^{とも}偕に^あ在らんことを、



なんぢのしんとも、
 爾 神

司祭) ^{こころうえ}心上に向うべし、^{むか}



しゅにむかえり、
 主 向

司祭) ^{しゅ}主に^{かんしゃ}感謝すべし、



司祭) (黙誦： ^{なんぢ かしょう なんぢ さんよう なんぢ さんび なんぢ かんしゃ なんぢ いつさい} 爾 を歌 頌 し、 爾 を讃 揚 し、 爾 を讃 美 し、 爾 に感 謝 し、 爾 が一切

^{おさ ところ おい なんぢ ふ おが とうぜん ぎ けだしなんぢ なんぢ どく}
治むる 處 に於て 爾 に伏し拜むは當 然にして義なり、 蓋 爾 と 爾 の獨

^{せいし なんぢ せいしん い がた し がた み ベ はか ベ なが}
生子と 爾 の 聖 神は、 言い難く、 知り難く、 見る可からず、 測る可からず、 永

^{あ つね かわ かみ なんぢ われら む ゆう おちい もの また}
く在り、 恒に變らざる神なり、 爾 は我等を無より有となし、 陥りし者を復

^{おこ およ われら てん のぼ なんぢ らいせい くに たま いた ばんじ}
起し、 及び我等を天に升らしめて、 爾 が來 世の國を賜うに至るまで萬事を

^{おこな や これら ため およ われら し ところ し ところ あらわ ところ}
行 いて止めず、 此等の爲に、 凡そ我等が知る 所、 知らざる 所、 顯れし 所、

^{あらわ ところ われら たま しょおん ため われらなんぢ なんぢ どくせいし}
顯れざりし 所 の我等に賜わりし諸 恩の爲に、 我等 爾 と 爾 の獨 生子と

^{なんぢ せいしん かんしゃ またこ ほうじ ため なんぢ かんしゃ なんぢこれ われら}
爾 の 聖 神とに感 謝す、 又此の奉事の爲に 爾 に感 謝す、 爾 之を我等の

^{て う あまん たま しか せんせん てんししゅおよ まんまん てんし}
手より領くるを 甘 じ給えり、 然れども千 千の天使首 及び萬 萬の天使、 ヘル

^{およ りくよく もの たもく もの たか かけ もの つばさ そな もの}
ヴィム及びセラフィム、 六 翼の者、 多目の者、 高く翔る者、 翼 を具うる者

^{なんぢ まえ た}
は 爾 の前 に立ちて、)

司祭) ^{かちうた うた よ さけ い} 凱 歌 を歌 い、 籲 び、 叫 びて曰う、





司祭) (黙誦：人^{ひと}を愛^{あい}する主^{しゅ}宰^{さい}よ、我^{われ}等^らも此^この福^{ふく}たる軍^{ぐん}と偕^{とも}に籲^よびて曰^いう、聖^{せい}なる哉^{かな}、至^し
 聖^{せい}なる哉^{かな}、爾^{なんぢ}と爾^{なんぢ}の獨^{どく}生子^{せいし}と爾^{なんぢ}の聖^{せい}神^{しん}、聖^{せい}なる哉^{かな}、至^し聖^{せい}なる哉^{かな}、爾^{なんぢ}
 の光^{こう}榮^{えい}は威^い嚴^{げん}なり、爾^{なんぢ}は爾^{なんぢ}の世^せ界^{かい}を愛^{あい}して、爾^{なんぢ}の獨^{どく}生子^{せいし}を賜^{たま}うに至^{いた}り、
 凡^{およ}そ之^{これ}を信^{しん}ずる者^{もの}に沈^{ちん}淪^{りん}を免^{まぬ}か^えれて永^{えい}生^{せい}を得^えせしむ、彼^{かれ}來^{きた}りて、凡^{およ}そ我^{われ}等^ら
 に於^おける定^{てい}制^{せい}を成^{せい}全^{ぜん}し、付^{わた}されし夜^よ、正^{ただ}しく言^いえ^{みづか}ば親^{おのれ}ら己^{せかい}を世^{いのち}界^のの生^の命^のの
 爲^{ため}に付^{わた}しし夜^よ、其^{その}聖^{せい}にして至^し淨^{じょう}無^む玷^{てん}なる手^てに餅^{パン}を取^とり、感^{かん}謝^{しゃ}し、祝^{しゅく} 讃^{さん}し、
 成^{せい}聖^{せい}し、擘^さきて其^{その}聖^{せい}なる門^{もん}徒^と及^{およ}び使^し徒^とに予^{あた}えて曰^いえり、)

司祭) と取^{くら}りて食^{これ}え、是^{たい}我^{なんぢ}が體^{ため}、爾^さ等^{もの}の爲^{つみ}に擘^{ゆるし}かるる者^え、罪^{いた}の赦^いを得^えるを致^{いた}す、



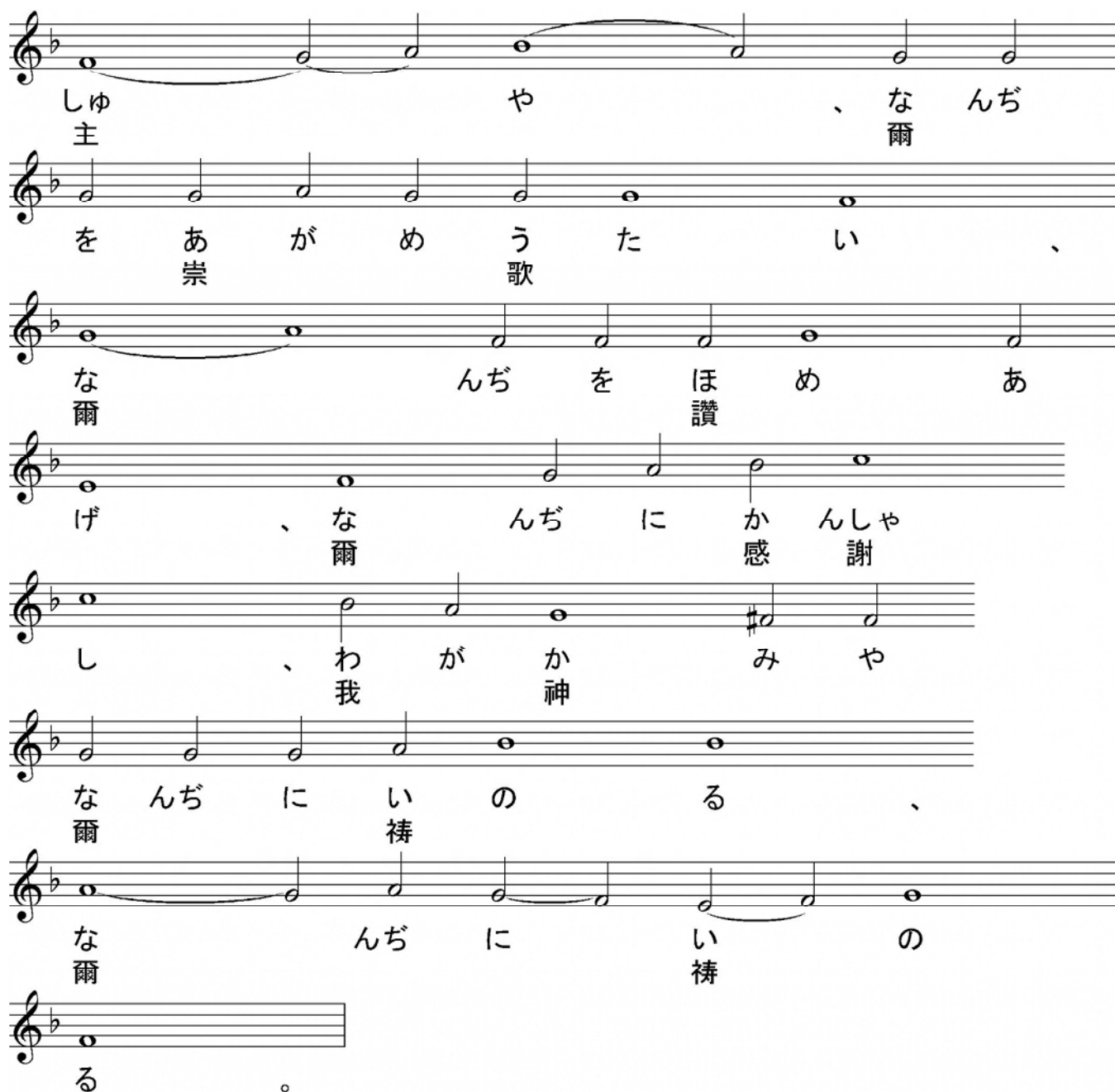
司祭) (黙誦：同^{おなじ}く晚^{ばん}餐^{さん}の後^{のち}に爵^{しゃく}を執^とりて曰^{いわ}く、)

司祭) 皆^{みな}之^{これ}を飲^のめ、是^{これ}我^{われ}の新^{しん}約^{やく}の血^ち、爾^{なんぢ}等^ら及^{およ}び衆^{おほ}くの人^{ひと}の爲^{ため}に流^{なが}さるる者^{もの}、罪^{つみ}の赦^{ゆるし}
 を得^えるを致^{いた}す、



司祭) (黙誦：故^{ゆえ}に我^{われ}等^ら此^この救^{すくい}を施^{ほどこ}す誠^{いましめ}、及^{およ}び凡^{およ}そ我^{われ}等^らの爲^{ため}に有^ありし事^{こと}、即^{すなわ}ち十^{じゅう}
 字^じ架^か、墓^{はか}、第^{だい}三^{さん}日^{じつ}の復^{ふく}活^{かつ}、天^{てん}に升^{のぼ}る事^{こと}、右^{みぎ}に坐^ざする事^{こと}、光^{こう}榮^{えい}なる再^{さい}度^どの
 降^{こう}臨^{りん}を記^き憶^{おく}して、)

司祭) 爾^{なんぢ}の賜^{たま}のを、爾^{なんぢ}の諸^{しよ}僕^{ぼく}よ、衆^{りし}の爲^{ため}一切^{いつさい}の爲^{ため}に爾^{なんぢ}に獻^{たてまつ}りて、



司祭) (黙誦：我等復 爾 に此の靈智なる無血の奉事を獻じて、願い祈り切に求む、 爾

の聖神を我等及び此の奠えたる祭品に遣し給え、)

司祭) (黙誦：第三時に 爾 の至聖神を 爾 の使徒に遣わしし至善の主よ、之を我等より取

り上ぐることを勿れ、尚 我等 爾 に祈る者の衷に之を新にせよ、神よ、 潔

き心を我に造り、正しき 靈を我の衷に改め給え、

第三時に 爾 の至聖神を 爾 の使徒に遣わしし至善の主よ、之を我等より

取り上ぐることを勿れ、尚 我等 爾 に祈る者の衷に之を新にせよ、我を 爾 の

顔より逐うことを勿れ、 爾 の聖神を我より取り上ぐることを勿れ、

だいさんじ なんぢ しせいしん なんぢ しと つか しぜん しゅ これ われら
第三時に 爾の至聖神を 爾の使徒に遣わしし至善の主よ、之を我等より

と あ なか なおわれらなんぢ いの もの うち これ あらた
取り上ぐる事勿れ、尚我等 爾に祈る者の衷に之を新にせよ、)

司祭) このパンもつ なんぢ そんたい な
此の餅を將て、 爾のハリストスの尊體と成し、アミン。

こ しゃくちゅう もの もつ なんぢ そんけつ な
此の爵 中 の者を將て、 爾のハリストスの尊血と成し、アミン。

なんぢ せいしん もつ これ へんか
爾の聖神を以て之を變化せよ、アミン。アミン。アミン。

ねがわ これ う もの ため たましい けいせい しょざい ゆるし なんぢ
(黙誦: 願くは此は領くる者の爲に、 靈の警醒となり、諸罪の赦となり、 爾

せいしん たいごう てんごく え なんぢ お ゆうかん しんあん
が聖神の體合となり、天國を得ることとなり、 爾に於ける勇敢となり、 審案

あるい ていざい
或は定罪とならざらんことを、

また れいち ほうじ しん もつ ねむ げんそ れつそ たいそ よげんしゃ しと
又この靈智なる奉事を、信を以て寝りし元祖・列祖・太祖・預言者・使徒・

でんどうしゃ ふくいんしゃ ちめいしゃ ひょうしんしゃ せつせいしゃ およ およ しん もつ おわ
傳道者・福音者・致命者・表信者・節制者、及び凡そ信を以て終

ぎ たましい ため なんぢ けん
りし義なる 靈の爲に 爾に獻ず、)

司祭) こと しせいしけつ いたさんび われら こうえい ぢよさい しょうしんぢよ えいていどうぢよ
特に至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光榮の女宰・生神女・永貞童女マ

りヤの爲、

【 常に福 】 ※祭日に他の「^{ザダストイニク}生神女讚詞」を歌う例あり

つ ね に さ い わ い に し て ま っ た く き ず な き
常 福 全 玷 なき

し ょ う し ん ぢ ょ 。 わ が か み の は は た る な ん ぢ を
生 神 女 我 神 母 爾

さ い わ い な り と と の う る は ま こ と に あ た
福 称 眞 當

れ り 。

へ ル ガ イ ム よ り と 尊 う と く セ ラ フ イ ム に な ら び な く
尊 並



司祭) (黙誦: 聖預言者・前驅・授洗イオアン、光榮にして讃美たる聖使徒、及び爾が

諸聖人の爲に獻ず、神よ、彼等の祈禱に因りて我等を顧み、並に凡そ

永生の復活の望を懷きて寝りし者を記憶して、彼等を爾が顔の光

の照す所に安息せしめ給え、

又爾に禱る、主よ、爾が眞實の言を正しく傳うる正敎者の凡の

主敎品、凡の司祭品、ハリストスに因る輔祭品、及び悉くの神品を

記憶せよ、

又此の靈智なる奉事を、全世界の爲、聖・公・使徒の敎會の爲、潔淨

にして尊く生を度る者の爲、我が國の天皇及び國を司る者の爲に

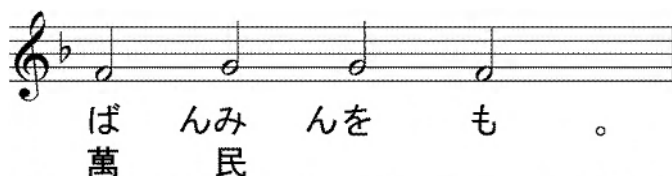
爾に獻ず、主よ、彼等に泰平の國政を賜え、我等も彼等の平和により、

凡の敬虔と潔淨とを以て、恬静安然にして生を度らんが爲なり、)

司祭) 主よ、殊に敎會を司る尊貴なる我等の全日本の府主教セラフィムを記憶し、

彼等を平安・無難・尊貴・壮健・長壽なる者、及び爾が眞實の言を正しく傳

うる者として、爾の聖なる敎會に與え給え、

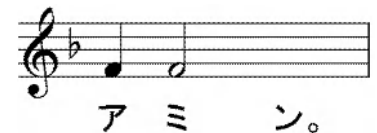


司祭) (黙誦: 主よ、我等が居る所の此の都邑と凡の都邑と地方、及び信を以て此の中

に居る者を記憶せよ、主よ、航海する者、旅行する者、病を患うる者、艱

なん あ もの とりこ もの およ かれら すくい きおく しゅ なんぢ しよせい
 難に遭う者、擄となりし者、及び彼等の救を記憶せよ、主よ、爾の諸聖
 どう もの たてまつ ぜんぎょう おこな もの およ ひんしゃ きねん もの きおく およ
 堂に物を獻り、善業を行なう者、及び貧者を記念する者を記憶し、及
 われらしゅうじん なんぢ あわれみ た たま
 び我等衆人に爾の憐れみを垂れ給え、)

司祭) ならび われら くち いつ こころ いつ なんぢちち こ せいしん しそんしげん な さん
 並に我等に、口を一にし心を一にして、爾父と子と聖神の至尊至嚴の名を讃
 えいさんしょう たま いま いつ よよ
 榮讃頌するを賜え、今も何時も世に、

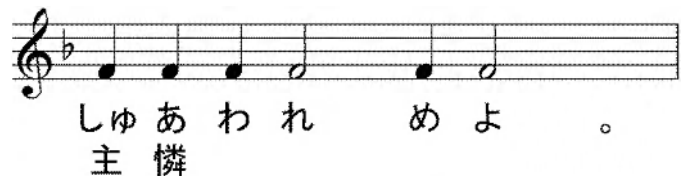


司祭) ねがわ おおい かみ わ きゅうしゅ あわれみ なんぢしゅうじん とも あ
 願くは大きな神、我が救主イイススハリストスの憐れみは、爾衆人と偕に在ら
 んことを、



【 増聯禱 】

司祭) われらしよせいじん きおく てまたまたあんわ しゅ いの
 我等諸聖人を記憶して、復又安和にして主に禱らん、



司祭) すで けん およ せい とうと さいひん ため しゅ いの
 已に獻ぜられ及び聖にせられし尊き祭品の爲に主に禱らん、



司祭) ひと あい わ かみ これ そのせい てんじょう むけい さいだん お ぞくしん けいこう
 人を愛する我が神が、之を其聖なる天上の無形の祭壇に置き、屬神の馨香と
 う われら むく しんみょう おんちよう せいしん たまもの くだ ため いの
 して享け、我等に報いて、神妙の恩寵と聖神の賜とを降すが爲に禱らん、



司祭) われらもろもろ うれい いかり あやうき まぬか ため しゅ いの
 我等諸の憂愁と忿怒と危難とを免るるが爲に主に禱らん、



司祭) ^{かみ なんぢ おんちよう もつ われら たす すく あわれ まも}
神よ、爾の恩寵を以て、我等を助け救い憐み護れよ、



司祭) ^{こ ひ じゅんぜん せいせい へいあん むざい しゅ もと}
此の日の純全、成聖、平安、無罪ならんことを主に求む、



司祭) ^{へいあん てんし ただ きやうどうし わ れいたい しゅ ごしや たま しゅ もと}
平安の天使、正しき教導師、吾が靈體の守護者を賜わんことを主に求む



司祭) ^{われら つみ あやまち なだ ゆる しゅ もと}
我等の罪と過とを宥め赦さんことを主に求む、



司祭) ^{われら たましい ぜん えき こと およ せかい へいあん たま しゅ もと}
我等の靈に善にして益ある事、及び世界に平安を賜わんことを主に求む、



司祭) ^{われら いのち よじつ へいあん つうかい もつ おわ しゅ もと}
我等の生命の餘日を平安と痛悔とを以て終らんことを主に求む、



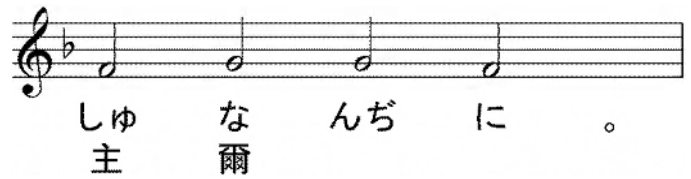
司祭) ^{われら いのち おわり かな やまい はぢ へいあん る こと およ}
我等の生命の終がハリスティアニンに適い、疾なく、耻なく、平安なること、及び

^{おそ しんばん おい よろ こたえ たま もと}
ハリストスの畏るべき審判に於て宜しき對をなすを賜わんことを求む、



司祭) ^{しん どういつ せいしん たいごう もと われらおのれ みおよ たがい おのおの み もつ ならび} 信の同一と聖神の體合とを求めて、我等己の身及び互に各の身を以て、并

^{ことごと われら いのち もつ かみ いたく} に 悉くの我等の生命を以て、ハリストス神に委託せん、



司祭) (黙誦: ^{ひと あい しゅさい われら わ ことごと いのち のぞみ なんぢ ゆだ ねが} 人を愛する主宰よ、我等は我が 悉くの生命と 望とを 爾に委ねて、願

^{いの せつ もと われら きよ りょうしん もつ なんぢ てんじょう おそ きみつ} い祈り切に求む、我等に、淨き良心を以て、爾が天上の畏るべき機密、

^{こ せい ぞくしん えん あづか たま こ つみ ゆるし あやまち なだめ} 此の聖せられたる屬神の筵に 與るを賜いて、此れが罪の赦、過の宥、

^{せいしん たいごう てんごく しぎょう なんぢ お ゆうかん しんあんあるい ていざい} 聖神の體合、天國の嗣業、爾に於ける勇敢となりて、審案或は定罪

^{いた たま} とならざるを致させ給え、)

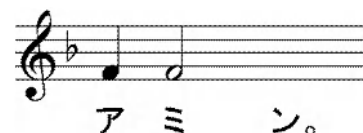
【 天主經 】

司祭) ^{しゅさい われら いさみ もつ つみ え あえ なんぢてん かみちち よ い たま} 主宰よ、我等に 勇を以て、罪を獲ずして、敢て 爾 天の神父を籲びて言うを賜え、





司祭) ^{けだしくに けんのう こうえい なんぢち こ せいしん き いま いつ よよ}
蓋 國と權能と光榮は 爾 父と子と聖神に歸す、今も何時も世に、



司祭) ^{しゅうじん へいあん}
衆 人に平安、



司祭) ^{なんぢら こうべ しゅ かが}
爾 等の 首 を主に屈めよ、



司祭) (黙誦: ^{み べ おう そのほか がた のうりよく もつ ばんゆう かくてい そのじれん おお}
見る可からざる王、其量り難き能力を以て萬有を畫定し、其慈憐の多

^{もつ ばんぶつ む ゆう しゅ われらなんぢ かんしゃ しゅさい なんぢ}
きを以て萬物を無より有となしし主よ、我等 爾 に感謝す、主 宰よ、 爾

^{みづか なんぢ こうべ かが もの てん かえり たま けだしけつにく かが あら}
親ら 爾 に 首 を屈めし者を天より 顧 み給え、蓋 血肉に屈めしに非ず、

^{すなわちなんぢおそ かみ かが ゆえ しゅさい なんぢ ここ そな もの われ}
乃 爾 畏るべき神に屈めり、故に主 宰よ、 爾 は此に奠えたる者を、我

^{らしゅうじん ぜん ため かくじん ひつよう おう ひとし わか こうかい もの とも}
等 衆 人の善の爲に、各 人の必要に應じて 等 く頒ち、航海する者と偕

^{こうかい りょこう もの とも りょこう れいたい いし やまい うれ もの}
に航海し、旅行する者と偕に旅行し、靈體の醫師として、病 を患うる者

スハ領聖詞」を歌うことが多い。

日本正教会では神品領聖時に『主日領聖詞』に代えて、早課イルモス（其の週の調、又は生神女のカタワシヤ等）、スティヒラ等を歌うことが多いが、これに奉事規程上の根拠はない。

歌えるものがない場合は、聖詠經を誦經しても良い。

)

【 領聖詞 第148 聖詠 】 ※繰り返し歌う



句) そのことごと てんし かれ ほ あ そのことごと ぐん かれ ほ あ
其 悉 くの天使よ、彼を讃め揚げよ、其 悉 くの軍よ、彼を讃め揚げよ。

句) ひ つき かれ ほ あ ことごと ひか ほし かれ ほ あ
日と月よ、彼を讃め揚げよ、 悉 くの光る星よ、彼を讃め揚げよ。

句) しよてん てん てん うえ みづ かれ ほ あ
諸 天の天と天より上なる水よ、彼を讃め揚げよ。

句) しゅ な ほ あ けだしかれい すなわちな めい すなわちつく かれ
主の名を讃め揚げべし、 蓋 彼言いたれば、 即 成り、命じたれば、 即 造られたり、彼
は之を立てて世に至らしめ、 則を與えて之を踰えざらしめん。

句) ち しゅ ほ あ おおうお ことごと ふち ひ あられ ゆき きり しゅ ことば したが ぼうふう
地より主を讃め揚げよ、大 魚と 悉 くの淵、火と 霰、雪と霧、主の 言 に 従 う 暴 風、
やま ことごと おか くだもの き ことごと はくこうぼく やじゅう もろもろ かちく は もの と
山と 悉 くの陵、 果 の樹と 悉 くの栢香木、野 獣と 諸 の家畜、匍う物と飛
とり ち しょおう ばんみん ぼくはく ち しょううし しょうねん しょうぢょ おきな わらべ しゅ な
ぶ鳥、地の諸王と萬民、牧伯と地の諸有司、少 年と處 女、翁 と 童 は、主の名
ほ あ けだしただそのな たか あ そのこうえい てんち あまね
を讃め揚げべし、 蓋 惟 其名は高く擧げられ、其 光 榮は天地に 徧 し。

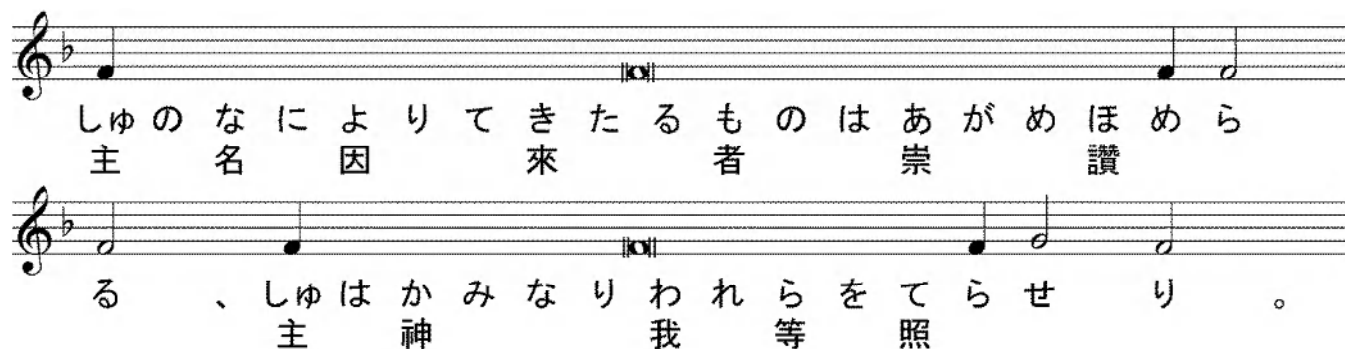
句) かれ そのたみ つの たか そのしよせいじん しよし かれ した たみ さかえ たか
彼は其 民の角を高くし、其 諸 聖 人、イズライリの諸子、彼に親しき民の 榮 を高く
せり。

【 大パスハ領聖詞 】 ※繰り返し歌う



【 信徒領聖 】

司祭) ^{かみ おそ こころ しん もつ ちか きた} 神を畏るる 心と信とを以て近づき來れ、



全員) ^{しゅ われしん か う みと なんぢ じつ せいかつ かみ こ ざいにん すく} 主よ我信じ、且つ承け認めて、爾を實にハリストス生活の神の子、罪人を救うが

^{ため よ きた もの しゅうざいにん うちわれだいいち またしん こ すなわちなんぢ し}
爲に世に來りし者となす、衆罪人の中我第一なり、又信ず、此れは乃爾が至

^{じょう たい こ すなわちなんぢ しそん ち ゆえ なんぢ いの われ あわれ わ じゆう}
淨の體、此れは乃爾が至尊の血なりと、故に爾に祈る、我を憐み、我が自由

^{じゆう と自由ならずして、ことば おこない し し おか しょうざい ゆる たま ならび}
と自由ならずして、言と行にて、知ると知らずして、犯しし諸罪を赦し給え、並

^{われ ていざい なんぢ しじょう きみつ う つみ ゆるし えいせい え いた}
に我に定罪なく、爾が至淨なる機密を領けて、罪の赦しと永生とを得るを致させ

^{たま}
給え、アミン。

^{かみ こ いまわれ なんぢ きみつ えん あづか もの い たま けだしわれなんぢ あだ き}
神の子よ、今我を爾が機密の筵に與る者として容れ給え、蓋我爾の仇に機

^{みつ つ なんぢ ごと せつぶん な すなわちうとう ごと なんぢ う}
密を告げざらん、また爾にイウダの如き接吻を爲さざらん、乃右盜の如く爾を承

^{みと い しゅ なんぢ くに おい われ きおく しゅ いの なんぢ せい きみつ}
け認めて曰う、主よ、爾の國に於て我を記憶せよと、主よ、祈る爾の聖なる機密を

^{う わ ため しんあんあるい ていざい れいたい いやし}
領くるは、我が爲に審案或は定罪とならず、すなわち靈體の醫とならんことを、

【 大パスハ領聖詞 】 ※繰り返し歌う



司祭) (黙誦： ^{ふくかつ み せい しゅ ひとりつみ もの おが} ハリストスの復活を見て、聖なる主イイス・獨罪なき者を拜むべし、ハ

^{われらなんぢ じゅうじか おが なんぢ せい ふくかつ うた ほ なんぢ}
リストスよ、我等爾の十字架を拜み、爾の聖なる復活を歌い讃む、爾

^{われら かみ なんぢ ほかた かみ し ただなんぢ な と な しんじゃ}
は我等の神なればなり、爾の外他の神を知らず、唯爾の名を稱う、信者よ、

みなきた せい ふくかつ おが じゅうじか よろこび ぜんせかい
 皆 来りてハリストスの聖なる復活を拜むべし、十字架にて喜は全世界に

のぞ われらつね しゅ ほ あ そのふくかつ あが うた しゅ じゅうじか
 臨めばなり、我等恒に主を讃め揚げて、其復活を崇め歌わん、主は十字架

くぎ しの し もつ し ほろぼ
 に釘うたるるを忍びて、死を以て死を亡ししによる、

あらた ひか ひか しゅ こうえいなんぢ かがや
 新なるイエルサリムよ、光り光れよ、主の光榮爾に輝けばなり、シオン

いまいわ たのし なんぢ いさぎよ しょうしんぢょ なんぢ う しゅ ふくかつ
 よ、今祝いて樂めよ、爾も潔き生神女よ、爾が生みし主の復活を

よろこ たま
 歡び給え、

ああおい しせい ああちえ かみ ことば ちから なんぢ
 嗚呼大にして至聖なるパスハ・ハリストスよ、嗚呼智慧と神の言と能力よ、爾

くに く ひ おい われら なおしたし なんぢ う たま
 が國の暮れざる日に於て、我等に猶親く爾を領けさせ給え

しゅ なんぢ しそん ち もつ なんぢ しょせいじん きとう よ ここ きおく
 主よ、爾が至尊の血を以て、爾が諸聖人の祈禱に因りて、此に記憶せら

もの しょうがい あら たま
 れし者の諸罪を滌い給え、

ひと あい しゅさい わ たましい おんしゅ われら こ ひ おい なんぢ てん
 人を愛する主宰、我が靈の恩主よ、我等に、此の日に於ても、爾が天

じょう ふし きみつ う たま なんぢ かんしゃ われら みち なお われら
 上の不死の機密を領けさせ給いしを爾に感謝す、我等の途を直くし、我等

しゅうじん なんぢ おそ おそ けんご われら いのち まも われら あゆみ かた
 衆人を爾を畏るるの畏れに堅固にし、我等の生命を護り、我等の歩を固

たま こうえい しょうしんぢょ えいていどうぢょ およ なんぢ しょせいじん いのり
 め給え、光榮なる生神女・永貞童女マリヤ及び爾が諸聖人の祈と

ねがい よ
 願とに因りてなり、)

※ 全員が元の位置に戻って歌う準備ができてから「アリルイヤ」を歌う。



司祭) かみ なんぢ たみ すく およ なんぢ しぎょう ふく くだ
 神よ、爾の民を救い、及び爾の嗣業に福を降せ、





せ い し んを う け 、 た だ し きしんを え て 、
 聖 神 受 正 信 得
 わ か れ ざ る せ い さんしゃを お が む 、 か れ わ れ
 分 聖 三 者 拜 彼 我
 ら を す く い た ま え ば な り 。
 等 救 給

司祭) (黙誦: ^{かみ}神よ、^{ねがわ}願 ^{なんぢ}くは ^{しよてん}爾 は ^{うへ}諸 天の ^あ上に ^{なんぢ}舉げられ、^{こうえい}爾 の ^{ぜんち}光 榮は ^{おお}全地を ^{われ}蔽わん、我
 等 ^らの ^{かみ}神は ^{つね}恒に ^{あが}崇め ^ほ讃めらる、)

司祭) ^{いま}今も ^{いつ}何時も ^{よよ}世世に、



ア ミ ン。

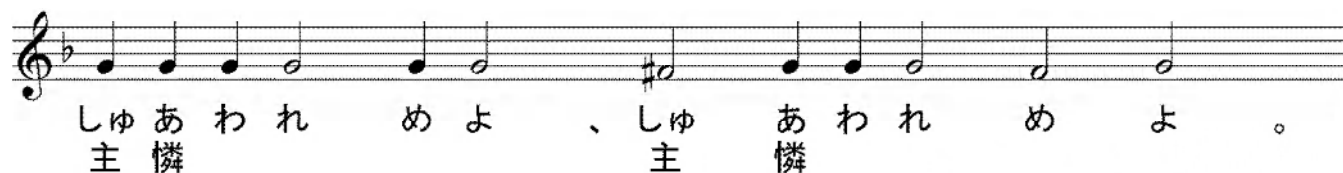


しゅよ、ね が わ く は わ が く ち は さんび に み て ら
 主 願 我 口 讃 美 満
 れ て 、 わ れ ら なんぢ の こう え い を う た
 我 等 爾 の 光 榮 歌
 わ ん。なんぢ わ れ ら に 、 しんせ い に し て ふ し
 爾 我 等 神 聖 不 死
 な る い の ち を ほ ど こ す なんぢ の せ い き み
 生 命 施 爾 の 聖 機 密
 つ を う くる を ゆ る せ ば な り 。 い の る わ
 領 許 祈 我
 れ ら を なんぢ の せ い せ い に ま も り 、 しゅ う じ
 等 爾 成 聖 護 り 終 日



司祭) ^{つつし}謹^たみて^{しんせい}立て、^{しじょう}神聖・^{ふし}至^{いのち}淨・^{ほどこ}不死^{てんじょう}にして^{おそ}生命を^{せい}施す^{せい}天上の^{せい}畏るべき^{せい}ハリストスの^{せい}聖

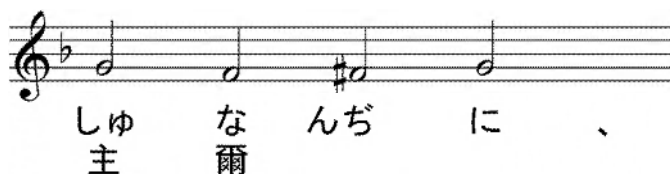
^{きみつ}機密^うを^{よろ}領けて、^{しゅ}宜しく^{かんしゃ}主に^{かん}感謝すべし、



司祭) ^{かみ}神よ、^{なんぢ}爾の^{おんちよう}恩寵^{もつ}を^{われら}以て^{たす}我等を^{すく}助け^{あわれ}救い^{まも}憐み^{まも}護れよ、

司祭) ^こ此の^ひ日の^{じゅんぜん}純全・^{せいせい}成聖・^{へいあん}平安・^{むざい}無罪^{もと}ならん^{もと}ことを^{われら}求めて、^{われら}我等^{おのれ}己の^{みおよ}身及び^{たがい}互に

^{おのおの}各の^み身を^{もつ}以て、^{ならび}并に^{ことごと}悉くの^{われら}我等^{いのち}の^{もつ}生命を^{かみ}以て、^{いたく}ハリストス^{かみ}神に^{いたく}委託せん、



司祭) ^{けだしなんぢ}蓋^{われら}爾は^{せいせい}我等の^{りわれら}成聖^{なんぢちち}なり、^こ我等^{せいしん}光榮を^{けん}爾父と^{いま}子と^{いつ}聖神に^{よよ}獻ず、^{よよ}今も^{いつ}何時も^{よよ}世世

に、



司祭) ^{へいあん}平安^いにして^い出づべし、

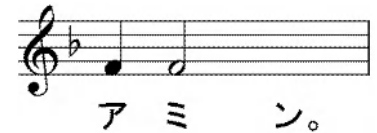


司祭) ^{しゅ}主に^{いの}禱らん、



司祭) ^{なんぢ}爾を^{さんよう}讃揚^{もの}する^{ふく}者に^{くだ}福を^{およ}降し、^{なんぢ}及び^{たの}爾を^{もの}恃む^{せい}者を^{しゅ}聖にする^{なんぢ}主よ、^{たみ}爾の^{すく}民を^{すく}救

およ なんぢ しぎょう ふく くだ なんぢ きょうかい じゅうまん まも なんぢ どう び
 い、及び爾の嗣業に福を降し、爾が教會の充滿を守り、爾が堂の美なるを
 あい もの せい なんぢ しんせい ちから もつ かれら こうえい およ われらなんぢ たの
 愛する者を聖にせよ、爾が神聖の力を以て彼等を光榮し、及び我等爾を恃む
 もの のこ なか なんぢ せかい なんぢ しよきょうかい しよしさい わ くに てんのうおよ くに
 者を遺す勿れ、爾の世界と爾の諸教會と諸司祭と、我が國の天皇及び國を
 つかさど ものおよ なんぢ しゅうじん へいあん たま けだしおよそ ぜん ほどこし およそ ぜんび
 司る者及び爾の衆人に平安を賜え、蓋凡の善なる施、凡の全備なる
 たまもの うえ なんぢこうめい ちち くだ われら こうえい かんしゃ ふくはい なんぢちち
 賜は、上より、爾光明の父より降るなり、我等光榮・感謝・伏拜を爾父と
 こ せいしん けん いま いつ よよ
 子と聖神に獻ず、今も何時も世に、



ね が わ く は し ゅ の な は あ が め ほ め ら れ て い ま よ
願 主 名 崇 讃 今

り よ よ に い た ら ん。ね が わ く は し ゅ の な は あ が
世 世 至 願 主 名 崇

め ほ め ら れ て い ま よ り よ よ に い た ら ん。ね が
讃 今 世 世 至 願

わ く は し ゅ の な は あ が め ほ め ら れ て い ま よ り よ
主 名 崇 讃 今 世

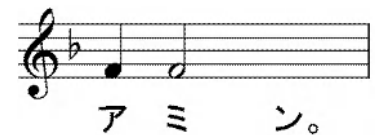
よ に い た ら ん。
世 至

誦經) われいづ とき しゅ ほ あ かれ ほ つね わ くち あ わ たましい しゅ
 我何れの時にも主を讃め揚げん、彼を讃むるは恒に我が口に在り、我が靈は主
 もつ ほこ おんじゅう もの き たの われ とも しゅ とうと とも かれ な あが
 を以て誇らん、溫柔なる者は聞きて樂しまん。我と偕に主を尊め、偕に彼の名を崇
 ほ われかつ しゅ たづ かれ われ き い わ すべ あやう われ まぬか
 め讃めん。我嘗て主を尋ねしに、彼は我に聆き納れて、我が都ての危きより我を免
 たま め あ かれ あお もの てら かれら おもて はぢ う こ
 れしめ給えり。目を擧げて彼を仰ぐ者は照されたり、彼等の面は愧を受けざらん。此の
 まづ ものよ しゅ き い これ そのことごと かんなん すく しゅ つかい しゅ
 貧しき者呼びしに、主は聆き納れて、之を其悉くの艱難より救えり。主の使は主

おそ もの めぐ まも かれら たす あぢわ しゅ いか じんじ み かれ たの
を畏るる者を環り衛りて、彼等を援く。味 えよ、主の如何に仁慈なるを見ん、彼を恃
ひと さいわい およ しゅ せいじん しゅ おそ けだしかれ おそ もの とぼ
む人は 福 なり。凡そ主の聖人よ、主を畏れよ、蓋 彼を畏るる者は乏しきことな
し。わか しし とぼ う ただしゅ たづ もの なん こうふく か
少き獅子は乏しくして餓え、唯 主を尋ぬる者は何の幸福にも缺くるなし。

司祭) (黙誦： みづか ほうりつ しよよげんしゃ じょうまん ちち ていせい ことごと じょうまん
しハリストス我が神よ、常に我等の心を喜と樂とに成満せしめ給え、
いま いつ よよ
今も何時も世に、)

司祭) ねがわ しゅ こうふく そのおんちよう じんあい よ つね なんぢら あ いま いつ
願くは主の降福は、其恩寵と仁愛とに因りて常に爾等に在らん、今も何時も
よよ
世に、



※ もし永眠者記憶を続けて行う場合はP33【 ^{リテイヤ}永眠者の爲の熱衷祈祷】に飛ぶ。

【 終結 】

司祭) かみわれら たのみ こうえい なんぢ き こうえい なんぢ き
ハリストス神我等の恃よ、光榮は爾に歸す、光榮は爾に歸す、



司祭) し ふくかつ われら まこと かみ そのしじょう はは こうえい さんび
死より復活せしハリストス我等の眞の神は、其至浄なる母、光榮にして讃美たる
せいしと われら せいしんぷ だいしゅきょうせいきんこう
聖使徒、我等の聖神父コンスタンチノーポリスの大主教聖金ロイオアン、

くくしょうほうしん わがしよしんぷ およ しょせいじん きとう より われら あわれ すく
克 肖 捧 神なる我 諸 神父、(某) 及び諸 聖 人の祈禱に因て我等を 憐 み救わん。

ぜん　ひと　あい　しゅ
善にして人を愛する主なればなり、



【 萬壽詞 】



(祈禱終了、十字架接吻)

【 感謝祷 】

【 幾年も A 】

い 幾 く と 歳 せ も 、 い 幾 く と 歳 せ も 、 い 幾 と 歳 せ も 。

【 幾年も B 】

い 幾 く と 歳 せ も い 幾 く と 歳 せ も い 幾 と 歳 せ も い 幾 と 歳 せ も い 幾 と 歳 せ も 。

【 永眠者の爲の熱衷祈禱^{リテイヤ} 】

ひ と を あ い す る き ゆ う せ い し ゅ よ 、 し せ し ぎ
人 愛 救 世 主 死 義

じ ん の た ま し い と と も に 、 な ん ち が ぼ く ひ の
人 霊 借 爾 僕 婢

た ま し い を や す ん ぜ し め て 、 か れ ら を
霊 安 彼 等

な ん ち に あ る ふ く ら く の い の ち に 、 ま も り
爾 在 福 樂 生 命 護

た ま え 。 し ゅ よ な ん ち が し ゅ せ い じ ん の あ ん
給 主 爾 諸 聖 人 安

そ く す る と こ ろ に 、 な ん ち が ぼ く ひ の た ま
息 處 爾 僕 婢 霊

し い を や す ん ぜ し め た ま え 。 な ん ち ひ と り ひ
安 給 爾 獨 人

と を あ い す る し ゅ な れ ば な り 。
愛 主

こ う え い は ち ち と こ と せ い し ん に き す 、
光 榮 父 子 聖 神 歸

な ん ち は ぢ ご く に く だ り て つ な が れ し も の の
爾 地 獄 降 繋 者

く さ り を と き た る か み な り 。 み づ か ら
鎖 釈 神 親

なんぢがぼくひのたましいをやすんぜしめ
爾 僕 婢 靈 安

たまえ。

いまもいつもよよに、アミン。
今 何 時 世 世

ひとりいさぎよくきずなきどうていぢよ、たね
獨 潔 瑕 童 貞 女 種

なくしてかみをうみしものよ、かれらの
神 生 者 彼 等

たましいのすくわれんことをいのりたま
靈 救 祈 給

え。

【 重聯禱 】

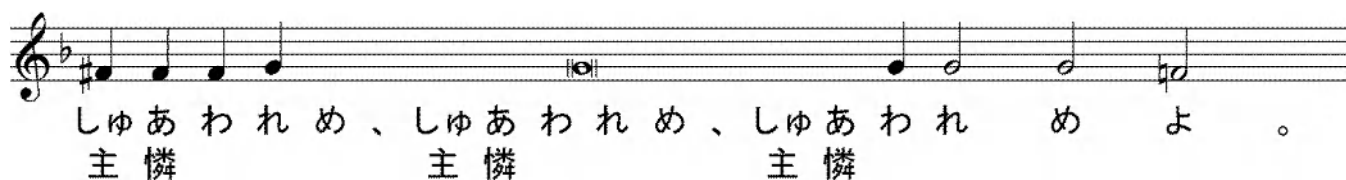
司祭) かみ なんぢ おおい あわれみ より われら あわれ なんぢ いの き い あわれ
神よ、爾の大なる憐に因て我等を憐めよ、爾に禱る、聆き納れて憐めよ、

しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅあわれめよ。
主 憐 主 憐 主 憐

司祭) またねむ かみ ぼくひ たましい あんそく ため およ かれら およ じゆう じゆう
又寝りし神の僕婢(某)の靈の安息の爲、及び彼等に凡そ自由と自由ならざ
る罪の赦されんが爲に禱る、

しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅあわれめよ。
主 憐 主 憐 主 憐

司祭) しゅかみ かれら たましい しょぎじん あんそく ところ い たま いの
主神が彼等の靈を諸義人の安息する處に入れ給わんことを禱る、



司祭) ^{かれら かみ あわれみ てんごく しょざい ゆるし たま わがし おうおよ}
彼等に神の 憐 と天國と諸罪の 赦 とを賜わんことを、ハリストス我死せざる王 及
^{かみ ねが}
び神に願う、



司祭) ^{しゅ いの}
主に禱らん、



司祭) ^{もろもろ れいしん もろもろ にくたい かみ し ほろ あくま むなし なんぢ せかい いのち}
諸 の靈神と 諸 の肉體との神、死を亡ぼし惡魔を 虚くし、爾の世界に生命

^{たま しゅ なんぢみづか ねむ なんぢ ぼくひ たましい ひか ところ しげ くさば}
を賜いし主よ、爾 親ら寝りし爾の僕婢(某)の 靈を光る處、茂き草場、

^{へいあん ところ やまい かなしみ なげき とお ところ あんそく ぜん ひと あい}
平安の處、病と悲と歎との遠ざかる處に安息せしめ、善にして人を愛する

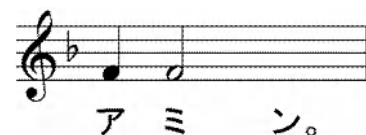
^{かみ より かれら あるい ことば あるい おこない あるい おもい おか ことごと つみ ゆる}
神なるに因て彼等が或は言、或は行、或は思にて犯しし 悉くの罪を赦

^{たま けだしひとひとり い つみ おこな もの ただなんぢ つみ なんぢ ぎ えいえん}
し給え。蓋 人 一も生きて罪を行わざる者なし、唯 爾は罪なし、爾の義は永遠

^{ぎ なんぢ ことば しんじつ けだし われら かみ なんぢ ねむ なんぢ ぼくひ}
の義、爾の言は眞實なり。蓋 ハリストス我等の神よ、爾は寝りし 爾の僕婢

^{ふくかつ いのち あんそく われらこうえい なんぢ なんぢ むげん ちち しせいしぜん}
(某)の復活と生命と安息なり。我等光榮を爾と 爾の無原の父と至聖至善にし

^{いのち ほどこ なんぢ しん けん いま いつ よよ}
て生命を施す 爾の神とに獻ず、今も何時も世に、



【 永眠者の爲の小讃詞 ^{コンダク} 】





【 終 結 】

司祭) ^{かみわれら たのみ こうえい なんぢ き こうえい なんぢ き} ハリストス神我等の 侍 よ、光 榮は 爾 に歸す、光 榮は 爾 に歸す、



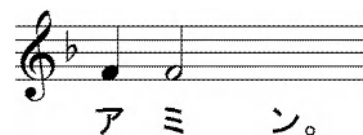
司祭) ^{し ふくかつ い もの し もの そのぜんのう て たも たま われら まこと} 死より復 活し、生ける者と死せし者を其 全 能の手に保ち給うハリストス我等の 眞 の

^{かみ そのしじょう はは こうえい さんび せいしと こくしょうほうしん わがしよしんぶ} 神は、其至 浄 なる母、光 榮にして讃美たる聖使徒、克 肖 捧神なる我 諸 神父、

(某) ^{およ しよせいじん きとう より ねむ ぼくひ たましい しよぎじん すまい い} 及び諸 聖 人の祈禱に因て、寝りし僕婢(某)の 靈 を諸義人の住所に入れ、

^{ふところ やす しよぎじん れつ くわ およ われら あわれ たま ぜん} アブラアムの 懷 に安んぜしめ、諸義人の列に加え、及び我等を 憐 み給わん。善に

^{ひと あい しゅ} して人を愛する主なればなり、



司祭^{しゅ} 主よ、爾^{なんぢ} の僕婢^{ぼくひ} (某^{さいわい}) の 福^{ねむり} なる 寢^{えいえん} に永 遠^{あんそく} の安 息^{あた} を與^{かれら} え、彼等^{えいえん} に永 遠^{きおく} の記 憶

を爲^な し給^{たま} え、



【 萬壽詞 】



(祈禱終了、十字架接吻)

りようせいかんしゃしゅくぶん
【 領 聖 感 謝 祝 文 】

かみ こうえい なんぢ き かみ こうえい なんぢ き かみ こうえい なんぢ き
神や光 榮は 爾 に歸す、神や光 榮は 爾 に歸す、神や光 榮は 爾 に歸す。

【 第一祝文 】 しゅわ かみ なんぢわれざいにん す なおなんぢ せい きみつ あづか もの
主我が神や、爾 我 罪 人を棄てずして、尚 爾 の聖なる機密に 與 る者
いた たま なんぢ かんしゃ われた もの なんぢ しじょう てん たまもの う
と致させ給うを 爾 に感謝す、我堪えざる者に 爾 が至 淨 なる天の 賜 を受くるを
ゆる たま なんぢ かんしゃ しゅさい ひと あい しゅ われら ため し ふくかつ われ
容し給うを 爾 に感謝す、主 宰・人を愛する主、我等の爲に死して復 活し、我が
たましい からだ おん あた これ せい ため われら こ おそ べ いのち ほどこ
靈 と 體 とに恩を與え、之を聖にするが爲に、我等に此の恐る可くして生命を 施 す
きみつ たま もの もと こ きみつ われ たましい からだ いや およそ てき がい か
機密を賜いし者や、求む此の機密は、我にも 靈 と 體 とを癒し、凡 の敵の害を驅
われ こころ め あきら われ たましい ちから へいあん しはぢ え しん いつわり
り、我が 心 の目を 明 かにし、我が 靈 の 力 を平 安にし、耻を得ざる信とし、 偽
あい えいち み なんぢ いましめ まも なんぢ しんせい おんちょう ま なんぢ
なき愛とし、睿智を充たし、爾 の 誠 を守らしめ、爾 が神聖の恩 寵 を益し、爾
くに つ もの え たま われ か ごと こ きみつ なんぢ せいせい
の國を嗣がしむる者となるを得せしめ給え、我は此くの如く、是の機密にて 爾 の成 聖
まも つね なんぢ おんちょう おも またおの ため せいかつ すなわちなんぢわ しゅさいおよ
に護られ、常に 爾 の恩 寵 を思い、復己が爲に生 活せず、 乃 爾 我が主 宰 及
おんしゅ ため せいかつ もつ えいせい のぞみ いだ こ よ はな えいえん いこい か
び恩 主の爲に生 活し、以て永 生の 望 を懷き、此の世を離れて、永 遠の 息 、彼の
しゅく もの た こえ およ なんぢ かんばせ い つく びぜん み もの かぎ
祝 する者の絶えざる聲、及び 爾 が 顔 の言い盡されぬ美善を見る者の限りなき
たのしみ ところ いた けだし わ かみ なんぢ なんぢ あい もの まこと のぞみ
樂 の 處 に至らん、蓋 ハリストス我が神や、爾 は 爾 を愛する者の 眞 の 望 と
い つく たのしみ およ ぞう う もの なんぢ よよ ほ うた
言い盡されぬ 樂 なり、凡そ造を受けし者は 爾 を世世に讃め歌う、「アミン」。

【第二祝文 聖大ワシリイの原文】 しゅさい かみ ばんせい おう ばんぶつ ぞうせいしゃ およ
主 宰ハリストス神、萬 世の王、萬 物の造 成 者や、凡
われ たま ところ しょぜん かついのち ほどこ しじょう なんぢ きみつ う たま
そ我に賜いし 所 の諸 善、且生命を 施 す至 淨 なる 爾 の機密を領けさせ給いしを
なんじ かんしゃ またなんぢ いの ぜん ひと あい しゅ われ なんぢ おおい した なんぢ
爾 に感謝す、又 爾 に祈る、善にして人を愛する主や、我を 爾 が 庇 の下に、爾
つばさ かげ まも われ いき た いた まで いさぎよ りょうしん もつ とうぜん
が 翼 の蔭に護り、我に呼吸の絶えんとするに至る迄、 潔 き 良 心を以て、當 然に
なんぢ せいたいせいけつ う もつ つみ ゆるし えいせい う いた たま けだしなんぢ いのち
爾 の聖 體 聖 血を領け、以て罪の 赦 と永 生とを得るを致させ給え、蓋 爾 は生命
かて せいせい いづみ しょぜん たま しゅ われらなんぢ ちち せいしん こうえい けん いま
の糧、成 聖の 泉、諸 善を賜う主なり、我等 爾 と父と聖 神とに光 榮を獻ず、今
いつ よよ
も何時も世世に、「アミン」。

【 第三祝文 聖シメヨン「メタフラスト」の原詩 】 わ ぞうせいしゅ あまん おのれ み かて
我が造 成 主、甘 じて 己 の身を糧と
われ あた ひ ふとうしゃ や もの もと われ や なか すなわちわ ひやくたいしよ
して我に與え、火にして不 當 者を焚く者や、求む我を焚く母れ、 乃 吾が百 體 諸

せつしんぶく い わ しょざい とげ や たましい きよ おもい せい すじ ほね かた
節 心 腹に入り、吾が諸 罪の棘を焚き、靈 を淨め、思 を聖にし、筋と骨とを固め、
ごかん あきら わ ぜんしん なんぢ おそ おそれ くぎ つね われ おお われ たも
五官を 明 かにし、吾が全身を、爾 を畏るる 畏に釘うち、常に我を庇い、我を保
ち、我を 靈 を害する 諸 の 行 と言 とより護り、我を淨め、我を滌い、我を
かざ われ おさ われ ひら われ てら わ またつみ すまい てひとりなんぢ せいしん
飾り、我を治め、我を啓き、我を照し、我が復 罪の住所たらずして、獨 爾 が聖神
すまい るあらわ およそ あくしゃおよそ よく われせいたい い よ なんぢ いえ
の住所たるを 顯 し、凡 の悪者 凡 の慾は、我 聖體の入るに依りて 爾 の家となり
もの に ひ に ごと たま われそのてんたつしゃ もろもろ
し者より逃ぐるごと、火より逃ぐるが如くならしめ給え、我 其轉達者として、諸 の
せいじゃ しょひん てんし なんぢ ぜんく ちえ しと およ なんぢ むてんしじょう はは なんぢ
聖者、諸品の天使、爾 の前驅、智慧なる使徒、及び 爾 が無玷至 淨の母を 爾 に
すす じれん しゅわ かれら きとう い なんぢ えきしゃ ひかり こ
進む、慈憐の主我がハリストスや、彼等の祈禱を容れて、爾 の役者を 光の子となし
たま けだしひとりしぜん しゅ なんぢ われら たましい せいせい こうめい われらみなかみ
給え、蓋 獨至善の主や、爾 は我等の 靈 の成聖と光明なり、我等皆神と
しゅさい よろ ところ ごと ひび こうえい なんぢ けん
主宰に宜しき 所 の如く、日々に光 榮を 爾 に獻ず。

【 第四祝文 】 しゅ われら かみ ねがわ なんぢ せいたい わ ため
主 イイススハリストス我等の神や、願 くは 爾 の聖體は、我が爲に
えいせい なんぢ そんけつ つみ ゆるし ねがわ こ かんしゃ まつり わ ため
永生となり、爾 の尊血は、罪の赦 とならん、願 くは此の感謝の 祭は、我が爲に
きえつ そうけん あんらく またおそ べ なんぢ さいど こうりん とき われざいにん なんぢ
喜悅と壯健と安樂とならん、又 畏る可き 爾 が再度の降臨の時、我 罪人に、爾
こうえい みぎ た え たま なんぢ しじょう はは しょせいじん きとう よ
が光 榮の右に立つを得せしめ給え、爾 が至 淨の母と諸 聖人との祈禱に依りてなり。

【 第五祝文 至聖生神女に捧ぐ 】 しせい ちょさい しょうしんぢょ わ くら たましい
至聖なる女 宰・生 神女、我が味みたる 靈 の
ひかり わ たのみ おおい かくれが なぐさめ よろこび なんぢ われた もの なんぢ こ し
光、吾が憑恃と幷幪と避 所と慰藉と歡喜や、爾 が我堪えざる者に、爾 の子の至
じょう たいしそん ち う もの え たま なんぢ かんしゃ なおいの まこと
淨の體至尊の血を領くる者となるを得せしめ給いしを 爾 に感謝す、猶 祈る、眞 の
ひかり う もの わ こころ れいもく あきらか ふし いづみ う もの われつみ ころ
光を生みし者や、吾が心 の靈目を 明 にせよ、不死の 泉を生みし者や、我 罪に殺
もの い たま じれん かみ じあい はは われ あわれ わ こころ しょうかん
されたる者を生かし給え、慈憐なる神の慈愛の母や、我を 憐み、吾が心 に 傷 感と
ひつう わ おもい けんそん わ とりこ いねん よびかえし たま われ いき た
悲痛、吾が 思に謙遜、吾が 虜となりし意念に呼 還を賜い、我に呼吸の絶えんとす
いた つみ え しじょう きみつ せいせい う たましい からだ いやし う
るに至るまで、罪を獲ずして、至 淨なる機密の成聖を受けて、靈 と體との 醫を得
いた ならび われ つうかい うけとめ なみだ あた しょうがいなんぢ かしょうさんえい
るを致し、並に我に痛悔と承認との 涙を與えて、生涯 爾 を歌 頌 讚 榮せしめ
たま けだしなんぢ よよ さんび こうえい み こうむ
給え、蓋 爾 は世世に讚美と光 榮とを満ち 被る、「アミン」。